文化

新ならの民俗通信　27

勺　禰子

新聞短歌と民俗〈上〉

▼新聞短歌とは何か

全国紙や地方紙を問わず、新聞には必ずと言っていいほど「短歌」「俳句」「川柳」など、短詩型文学の投稿欄がある。

広く人の目に触れる媒体に誰でも投稿できる、という点では、SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）をはじめ、近年ウェブ上で盛んに発表される作品と共通しているが、「選者によって選ばれる」という点に根本的な違いがあるといえる。

また、新聞短歌は「くらしや時代を反映した民衆詩」と言われ、その投稿者たちは「無名歌人」「アマチュア」と呼ばれることがある。しかし、何をもって名もなき歌人といい、プロとアマを区別しうるのだろうか。

これらの状況や問題を出発点として、「新聞短歌」の源流、関連文、各時代に投稿された短歌などから、「新聞短歌」の本質と「民俗」について考えてみたい。

くらしや時代を反映

本論は、2022年12月3日に奈良町の徳融寺をお借りし、コロナ禍以降2年8か月ぶりに開催した奈良民俗文化研究所の公開講座、「日本の民俗をきく」第28回「新聞短歌と民俗」をまとめ、補足するものである。

▼新聞短歌の幕開け

新聞に短歌欄が設けられたのは、近代的短歌結社の草分けである浅香社（あさかしゃ）会員の作品が、「日本」「自由新聞」「二六新聞」の各紙に発表された明治26（1893）年とされる。浅香社を立ち上げた落合直文（1861～1903）は与謝野鉄幹の師であり、直文の「砂の上にわが恋人の名をかけば波のよせきてかげもとどめず」は、「恋人」の言葉を使った最初の短歌として知られている。

浅香社の短歌を掲載した日本新聞社には、前年に正岡子規（1867～1902）が入社していた。子規の有名な『歌よみに与ふる書』は、明治31年2月から3月にかけて「日本」に連載され、翌32年12月4日の同社「日本附録週報」には、「短歌人選」として「日本」紙上に掲載された。「竹の里人」は子規の短歌での筆名。

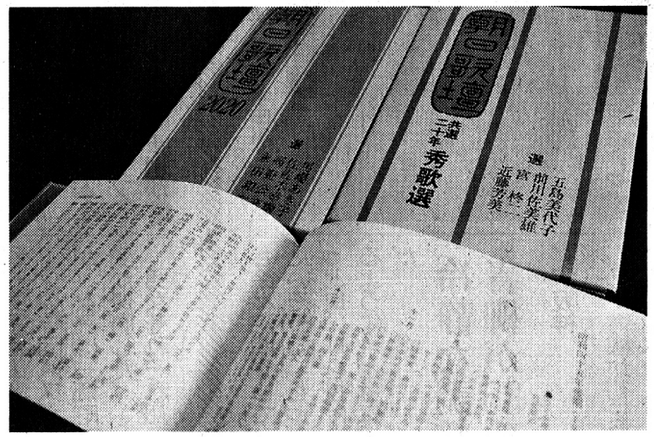
「家にあらば妹とふたりし飲む屠蘇を旅にしあればひとり飲みにき／格堂」

「皆遊ぶ年の始に車引きてひねもす走る人をあはれむ／紫之舎」

「人皆の晴着きそめて祝ふ日を屑拾ひ行くみなしごあはれ／藪下閑人」

など、子規の提唱する万葉調の中に、花鳥風月ではなく、人々のくらしがリアルに詠まれている。

現代まで連綿と続く新聞短歌のルーツは、いわゆる和歌革新運動の新聞紙上での実践であったといえる。



啄木から110年以上続く「朝日歌壇」は、毎年書籍化もされている。奈良ゆかりの前川佐美雄も長く選者をつとめた

▼石川啄木と「朝日歌壇」

明治42（1909）年に東京朝日新聞社の校正係として採用された石川啄木（1886～1912）は、翌43年夏に「朝日歌壇」選者に大抜擢（ばってき）される。そして44年2月までの半年足らずの間に計82回、総掲載歌564首の選歌等に熱中し、その命を縮めた（数字は平野英雄『啄木と朝日歌壇の周辺』より）。

啄木は、選者でありながら、自作短歌を別名で入選一覧に混ぜていた。

昨年末に逝去した歌人の篠弘は、著書『近代短歌史―無名者の世紀』でその理由を、「（応募）作品が少なかったからではない。かくれたかたちで、サンプルをしめし、選歌欄を内側から充実していこうとしたのである」と考察している。

子規や啄木といった強烈な個性を持つ選者の登場以前に、新聞短歌の成立に欠かせなかったのが近代郵便制度である。明治6（1873）年時点で、全国1100か所に郵便取扱所が開設されていたことを付け加えておきたい。

▼家永三郎と新聞短歌

本論を起こすきっかけとして私が出合ったのが、『一首百景―短歌と私』（朝日新聞学芸部編　文化出版局　1981）中の家永三郎の小文、「和歌とのふれあい」だった。専攻する歴史学に、愛好する文芸作品を活用してきたという家永だが、戦争中の歌はすべて「聖戦賛歌」だと思い込み、短歌を敬遠していた。

戦後、ある人から『朝日歌壇』に毎回のように戦争を詠んだ歌の出ていることを教えられた私は、（略）それ以来『朝日歌壇』だけはたんねんに読み始め、数年にわたりその切り抜きと保存を続けてきた。そして、戦前世代の心に刻み込まれた戦争の傷跡のいかに深く消し難いものであるかを痛感させられた」。さらに、戦争以外の作品にも心惹（ひ）かれた家永は、「わずか三十一文字のうちに、（略）大河小説となるであろうような深刻な人生を圧縮した趣きをもつ作品や、哲学的思索や宗教的信仰の到達点を彷彿させる人生・世界の深奥をのぞかせる印象を与える作品に目がとまるごとに、最初期待していなかったところだけにいっそう感銘が深かった」と記している。

家永に新聞短歌を教えた「ある人」とはだれか。私は柳田國男ではないか、と推測している。

（しゃく・ねこ＝歌人、奈良民俗文化研究所事務局長）

＝この項つづく、次回は3月3日付＝